

はないだろうか。

その視点で、この作品に対峙すれば、七・八句の解釈を従来ものから再考する必要があると思う。

#### 四

筆者は、その鍵となる語が七句目にある「偏」の解釈だと考える。この「偏」について詳細に考察されたものが、前述の隋源遠氏の論文である。(注4) 隋氏の論に拠りつつも七、八句の解釈については私論を以下、展開してみる。

「偏」は語釈の頁でも触れたが、『漢語大詞典』の説明にある「副詞。表示事実興希望相反亦表示違反客観要求。偏偏・偏要」の用法に該当するものと考えたい。

隋氏は、その所を前掲の「278立春 十二月十九日」を挙げ次のように説明する。

「曆と現実のギャップを描いた首聯だが、実は詩人自身の理想と現実との間の落差を意識したものである。注目したいのは副詞「偏」の使用である。副詞「偏」を「ひとへに」と訓読するのが一般的であるが、和語の「ひとへに」は漢語の副詞「偏」の同義語ではない。副詞「偏」に「ことさら」や「あやにくに」、人の気も知らないで」などの意味も含まれているという点については、既に小川環樹氏による指摘がある。『広韻』によると、偏の字義は「不正也。鄙也。衰也」である。「衰」は正当ではない、邪悪を意味する言葉で、「不正」